

早瀬 昇様 「悩みが吹き飛びました！」

素晴らしい講義をありがとうございました。

私は「高次脳機能障害のある人が自発的に安心して通える居場所を地域に作りたい」と任意団体を立ち上げて活動している者です。早瀬様の講義を聴いて、『～したい！ほっとかれへん！我慢できへん！』と思って始めたという点で、私もボランティアだったのか…と思いました。今までそう思ったことがなかったので、これまで抱いていたボランティア像とのギャップにちょっととまどいました。とはいえ、講義の中のひとつひとつがこれからこの団体をどうしていこうと悩んでいた自分の胸に響きました。

その一つ目は、『無償であることにも積極的意味がある』ということです。当団体は主に助成金で運営していますが、人件費までは捻出不可です。基本的に、実働は私一人なので無給であることは仕方ないと納得していますが、これがずっと続くのと思うと「これまで有給でやっていた仕事と同じなのに、いや、それ以上かもしれないのに無給とは・・・」と頭のすみで感じる自分がいたのも事実です。給料を出すためには法人化して法内事業所にすればよいことなのですが、こうして任意団体で活動を始めてみると法内の事業所ではできなかったことも可能になり、居心地の良さも少々感じるようになってきていました。そんな時にこの講義を聴いたわけです。

なるほど…内発的動機付けですね。私は作業療法士の仕事を長年してきましたが、作業療法でもこの内発的動機付けを大切にしています。作業療法士は対象者の作業をどうしたらやりやすくなるかをともに考え工夫し行動する職種です。作業の根幹には内発的動機付けがなくてはならないとされています。そして、こうした作業を行うことで人は健康になれる、と考えます。早瀬さまは『ボランティアは恋に似ている』とおっしゃいましたが、ボランティアは作業療法と多くの共通点があることに気がつきました。そして、給料が欲しいという根源的な欲求を満たすためには、本体の団体はあくまで無償に、それとは別に法内事業所ではなく会社をつくれればよいのではと思いつきました。

もう一つ印象に残ったのは、ボランティアと依頼する側の対等な協働関係を作るためには、IではなくYOUを主語にするということです。思い返せば、私はずっとIを主語にしてきました。当事者から「上から目線だ」と批判されたこともありましたが、よくわかりませんでした。それが今日初めて理解できました。『対等な助け合いの鍵は“夢”と“共感”』、給料が欲しいという夢を達成するためには一緒に会社を作ればいいし、誰かの夢を実現するために話し合っただけで考えればいい。この文章を書きながらいろいろなアイデアが浮かんできました。悩みがちょっと、いや、だいぶ、吹き飛びました。団体の先が見えてきました。本当にありがとうございました。

繁野玖美